

夙川学院の教育理念について

樋口 進

HIGUCHI Susumu

学校において、特に私立学校において、その教育がどのような理念のもとに行われるかは、最も根本的で重要なことである。本論文は、夙川学院の教育理念がその歴史において、どのように言い表され、また実際にどのような教育が行われたかを探求し、これからの課題を考えるものである。

キーワード：建学の精神、教育理念、婦徳の高い、キリスト教、愛、誠実

1. 創立

夙川学院は、日本の文教政策の転換期であり、近代私立学校の黎明期とも言える1880(明治13)年4月13日に神戸の御影弓場の地に、増谷かめによって創設された裁縫塾にさかのぼり、137年の歴史を歩んでいる。内田樹神戸女学院大学名誉教授は、「学校教育とは、まず『市場のニーズ』があってしかる後にそれを満たすべく教員や校舎や教材を整えるという順番で行われると多くの人は信じている。しかし、教育史では学校教育は教えることが自分の『使命(ミッション)』だと思い詰めた人の登場から始まるということを教えてくれる」と言っているが¹、このことは夙川学院の創設者増谷かめにもあてはまる。

創設に関して、『夙川学院百年史』(以下『百年史』)には、次のようにある²。「当時は女子の教育についての関心も低く、女子はお針けいこ

だけで十分であるという思想が支配的であった。このような情勢下において増谷かめは、女子教育の必要性を痛感し婦徳の高い、堅実な家庭婦人の養成を目指し、裁縫塾を創設した。」ここに、創設者増谷かめは、単に女子に裁縫の技術だけを教えるのではなく、最初から人間教育・人格教育を目指していた、ということが分かる。そこで、「婦徳の高い、堅実な家庭婦人の養成」というのが、夙川学院の建学の精神、教育理念とされてきた³。この創設は、かめが実に18歳の時であった。

ここで、日本の明治期における女子教育について概観しておこう。明治政府は近代国家と社会を建設するために教育の役割を早くから認識し、1871(明治4)年には文部省官立女学校計画布告を出し、1874(明治7)年には、東京神田に女子師範学校(後のお茶の水女子大学)を開設した。一方、プロテスタントの宣教師の来日と共に私立学校が次々に開設され、1870(明治3)年にはフェリス和英女学校が、1871(明治4)年には共立女学校(横浜共立学園)が、1874(明治7)年に

¹ 内田樹「ミッションスクールのミッション」、『大学時報』2016.11、34-ページ。

² 夙川学院百年史編集委員会編『夙川学院百年史』(以下『百年史』)学校法人夙川学院、1986年、12ページ。

³ 夙川学院創立130周年記念誌編集委員会編『創立百三十周年記念誌』学校法人夙川学院法人本部、2010年、24ページの学院長増谷和人の文章参照。

は神戸ホーム（神戸女学院）が、1877（明治10）年には立教女学院が設立された⁴。これらはすべて、キリスト教精神を建学の精神としたミッションスクールであった。

『夙川学院九十年史』（以下『九十年史』）には、裁縫塾の創設者増谷かめについての次のような一つのエピソードが伝えられている⁵。増谷家は代々神戸の酒造家であった。かめは資質聡明であったが、幼少の頃痛風を患い、脚の自由を損なったため歩行がやや困難であった。両親は、かめが裁縫を特技とするところから裁縫をもって一生の生計を立てさせようとした。また両親がかめにこの道を歩ませたもう一つの理由は、「酒は昔から多くの人々の嗜好するところがあるが、また、時には酒毒によって身を崩し、主婦を苦しめるに至った例も少なくないであろう。酒造家の娘が裁縫塾を開き、世の大事な娘にまで育て上げようとするのはせめてもの罪滅ぼしである」と考えたということである。『百年史』には、次のように記されている。「私塾はこの社会奉仕的精神を動機とする自然発生的なところにその強さと特色を見出すことができると思う。増谷裁縫塾は、自主自立を目指す一女性が社会奉仕の精神に生き甲斐を見だし、自己の適性發揮に生涯成就を全うした。⁶」第二次大戦後、夙川学院はキリスト教精神を教育理念に取り入れたが、この社会奉仕の精神は、キリスト教精神においても大きな柱である。もともと、キリスト教精神を取り入れたのは、二代目の理事長増谷義雄であり、かめはキリスト教のことについてはほとんど知らなかったであろうが、彼女の社会奉仕の精神は、期せずしてキリスト教精

神と通じるものであった。ちなみに、戦後キリスト教教育を導入した時に協力を仰いだ関西学院のスクールモットーは「Mastery for Service（奉仕のための練達）」であり、この奉仕の精神が学院の教育理念の一つとなっている。イエスは弟子たちに「仕える者になりなさい」と教え（マルコによる福音書 10:43-44）、召使いの務めであった足を洗うということを手本を示された（ヨハネによる福音書 13:4-5）。

以上のように、増谷かめの創設した増谷裁縫塾は、単に裁縫の技術を教えるだけの教育ではなく、家庭のよい主婦（良妻賢母）を育成しようとするものであり、人格教育、また社会奉仕の精神を担ったものであった、ということができる。

ただ、家庭のよい主婦像も、時代の変遷によって変化していくものであり、夙川学院の歴史においても当然その理想とする主婦像も成長変化し拡充されていくことになる。実際、その時代時代において、いろいろな試行錯誤が見られる。

私塾は公立の学校とは異なる特徴を持つことができる。増谷裁縫塾も、師の学徳を慕い、自ら求めて集まった学習集団であったから師弟の間柄は親密であり、敬愛の精神に満ち、塾生相互も共同生活を通して自然に温かい友情が培われ、常に平和で明るい雰囲気を作っていた、ということである⁷。

もう一つの特徴は、創造性ということである。一般に裁縫は技能を伝授するということが中心であって全く見よう見まねの注入主義に陥りやすかった。このように保守的になりがちな時代にあって、創設者かめは進歩的進取的で、創造性豊かな才能の持ち主であった。彼女の創造性によって「増谷流」が考案され、これは高く評価された。そのようなかめの創造性について『百年史』には、次のような文章が載せられている⁸。「校祖かめは、いつも物を仕立てるに当たっては、『時間がかかっ

⁴ 湊晶子『『キリスト教女子人格教育』の現代的使命』、『広島女学院大学論集』第63集、2016年、2ページ。

⁵ 夙川学院九十年史編集委員会編『夙川学院九十年史』（以下『九十年史』）学校法人夙川学院、1971年、25ページ。

⁶ 『百年史』14ページ。

⁷ 『百年史』74ページ。

⁸ 同77ページ。

てもよいから形の崩れないように、丁寧に縫いなさい』と言ひ、塾生の仕上がり作品には厳しい点検を行うことを終生続けた、と言う。技術のための技術として注入しがちな保守的傾向の強い塾において、このような独特の技法を創出したことは、教育的に価値の高いことである。言い換えると単なる技術としてではなく、晴れ着の最も大事な『正しい型に仕上げる』という点にも中心目標を置き、専心錬磨を加え、美しく完成する喜びを味わわせることを繰り返すことにより、やがて美的情操にまで高めたのであるから、技術を越えて情操豊かな人間性の陶冶をねらったものと言える。」ここには、後に短期大学の教育理念となった「誠実」と通じるものがある、ということができるとはなからうか。

2. 第二次世界大戦以前（戦前）の歴史

1901（明治34）年1月16日、裁縫女学校設立の認可を受け、増谷かめは、学校長となり、同年12月1日に増谷裁縫女学校を開校した。この時かめは、裁縫のほかに修身と家事の科目を設定し、良妻賢母主義に立って、家庭のよき主婦を育成するのに必要な家事・裁縫の技能と共に、婦徳の涵養に努めた。その特性としては、節約、勤勉、整理、整頓といった堅実なあり方である。ここにかめの「誠実に生きる」ことを重要視する人格教育に対する熱意が見受けられる。

特にかめは、修身科に力を注いだことが分かる。それは、修身科の教師に著名な人を招いているからである。一人は、大阪清水谷高等女学校（大阪府第一高等女学校）の初代校長であった大村忠二郎であり、彼に修身科の担当を依頼した。大村は、1899（明治33）年に公布された「高等女学校令」に合わせて大阪府にも女子の教育機関を整備することになった時、府立初の高等女学校「大阪府清水谷高等女学校（大阪府第一高等女学校）」の創立に尽力し、教育界に多大の影響を及ぼした人物である。日本女子大学を創設した成瀬仁蔵とも親交があり、成瀬の要請によって日本女子大学校附属

高等女学校の校長として迎えられようとしたが、当時の大阪府知事から強く慰留された、ということである。その大村を修身科の教師として招いたのだからかめ的人格教育に対する熱意も想像に難くない。『百年史』には、大村に関して次のような文が寄せられている⁹。「大阪府立清水谷高等女学校の初代校長大村忠二郎先生は、家庭主義、良妻賢母をモットーとして、生徒の薫陶に終始され、また愛怨の精神を教養して立派な人格を作り上げるよう導いておられた。ご臨終の遺訓は数々ありますが『信仰に生きよ』との絶語は肝に銘じて実践したいものであります。」ここには、大村の人格教育の基盤に宗教教育があったことが分かる。ちなみに、大村と親交のあった成瀬仁蔵は、プロテスタントの牧師でもあり、ミッションスクールの梅花女学校の校長も務めた人物である。

もう一人の修身科の教師は、1904年から1921年まで兵庫御影師範学校で校長を務めた和田豊である。彼も長い間師範学校の校長を務めた人物であるから、その人格教育の質の高さも想像に難くない。彼の修身の授業は、単なる勸善懲悪や戒律ではなく、真の人づくりの教育であった、と言う¹⁰。一裁縫学校がこのような著名な教育者を招いて人格教育を行ったということは、いかにかめが人格教育に力を入れたかの証左であろう。卒業生の話によると、修身の時間には、「女大学」の講義もしばしばなされ、また、旧来の塾型の教育による狭い家庭の中に閉じこもる主婦像に対して、「女子は新聞を読め」「今後の女性は目を外に向けよ」「教養を高めよ」などと激励する訓話もよくあったということである¹¹。そして、それらの話は、自分の経験に基づいたものであったので説得力もあり、師弟の信頼関係が強まり、厳しさと穏やかさを兼ね備えた理想的教育環境を醸し出していた、と記されている¹²。

さらに特筆すべきことは、1918（大正7）年1

⁹ 『百年史』67 ページ。

¹⁰ 同 145 ページ。

¹¹ 同 68 ページ。

¹² 同 146 ページ。

月2日に明石女子師範学校教諭仲上義雄を増谷家の婿養子として迎えたことである。これを仲介したのは、前述の御影師範学校長和田豊と明石女子師範学校長井田竹治である。これを見ても増谷女学校が周囲から期待されていたことがうかがえる。義雄は、当時の教員養成機関として最高峰であった東京師範学校を卒業し、新進気鋭であった。義雄は特に修身の科目を重要視し、人格教育に力を注いだ。そして彼は、創始者かめを継いで二代目の校長となり、その後の学校の発展に重大な寄与をなしていくことになるのである。

増谷裁縫女学校はその後、増谷女学校（1915〔大正4〕年）、増谷高等家政女学校（1927〔昭和2〕年）、増谷高等女学校（1936〔昭和11〕年）と校名は変遷するが、この間「婦徳の高い堅実な家庭婦人の養成」という建学の精神を維持しつつ、その時代に応じた教育を探求していった。

増谷高等女学校の時代は、日本は軍国主義が強くなり、戦争へと突き進んでいく時代であった。これに伴い、国家の政策、高等女学校規定（昭和18年）の精神に従って「軍神の母としての主婦像」を教える教育になって行った。そして学校経営のすべてを皇国民としての主婦を養成し、臣民の道を実践させることになった。皇国民としての主婦に要求される資質は、①家事・裁縫を家政科とし、家政の意味に深いものがあるとする。②合理的・創造的態도를重視する。③家族制度の伝統を固守し、祭祀敬老を重視する。④詔を承けては必ず慎むという絶対随順、滅私奉公の精神を涵養する、ということである。

そのような中でも心の教育は重んじられ、増谷家の養女となり後に婿養子義雄の妻となった増谷くらの提案で、魚崎時代には、師弟は言うまでもなく、上級生には廊下ですれ違っても礼をしようということになった¹³、と言う。この折り目正しさの中に道徳的なものをその日常生活の中で身につけていった。物資不足の戦時中これが思いやりの心にもつながった。物資不足は極限に達してい

たが、生徒たちは衣食足らずとも礼節は心得ていた、と言う。

3. 戦後の歴史

戦後の教育界の事情について『百年史』には、次のような文章がある¹⁴。終戦によって戦時教育令は廃止され、新日本建設の教育方針や、日本教育制度に対する管理政策など総司令部の指令に基づき、わが国の教育は漸次平常化され、米国教育使節団の勧告に基づき教育基本法、学校教育法が制定され、新学制も実施された。新生日本の志向する国家は民主的平和国家で、日本国憲法が理念である。この憲法の精神を受けて、新学制は実施された。すなわち、個人の価値と尊厳を認めることが新学制の基本であり、各人の能力と適性に応じて教育の機会を均等に与えようとする制度である。

神戸市灘区御影魚崎の地にあった増谷高等女学校は、1945（昭和20）年8月5日に戦災に遭って校舎は全焼してしまった。二代目の理事長・校長であった増谷義雄は学校を西宮市夙川の獅子ヶ口町（現神園町）に移転した。そして1948（昭和23）年3月10日に校名を学校法人「夙川学院中学・高等学校」と改称した。義雄が校名になぜ「学院」と付けたのかは、はっきりとは分からないが、当時西宮には「関西学院」や「神戸女学院」、また神戸には「神戸松蔭女子学院」など「学院」とつくキリスト教系の学校があったからではなかろうか。事実彼は翌年（1949年4月）、教育の理念としてキリスト教精神を取り入れたが、校名を変更した際に既にそのことを決意していたのではなかろうか。学校法人夙川学院として寄附行為を制定するにあたって学校教育の最も基礎となる目的に「キリスト教精神に則り」という文言を掲げた。彼はその後、キリスト教精神によって自由と平等

¹³ 同 144 ページ。

¹⁴ 同 71 ページ。

の新しい民主主義を理解できる日本人づくりを目指した新しい世の先駆けとなる女子教育に専念するのである。1949（昭和24）年4月1日に、関西学院でキリスト教宣教師として勤めていたピー・リー・パルモアを夙川学院に招いてはじめて礼拝が行われた。増谷義雄夫妻がパルモアを訪ねて宗教教育について協力を依頼したいきさつが『九十年史』に次のように記されている¹⁵。「教育はその根本において宗教的基盤が必要であることは自明のことです。終戦後、自然は荒廃し、物資は欠乏し、人々は自信を喪失して頹廢の極に立ったとき、これを救済するものは宗教的なもの以外にないことが痛感されました。本学院は従来一貫した女子教育の立場を取り、日本人としての良妻賢母主義を目標としてきましたが、ここにさらに広く高い立場に立つものを考えねばならなくなりました。それは国際的視野に立つ日本女性の教育、人間のあり方や世界についてのより広い深い見方・考え方を養うこと、深い宗教的情操の涵養であります。わが夙川学院は以前神戸の近くにありましたが、戦時中完全に破壊されました。今、夙川の購入した畑に学校の再建を始めました。わたしたちは宗教がなければ、真の教育ができないと確信しております。実のところ私たちは昔からの仏教徒ですが、昔の日本の宗教（仏教や神道）では近代日本の教育の基礎として知的に教育できないとの結論に達しました。つきましては私たちはキリスト教については本当に何も存じませんので、私たちの学校をキリスト教の学校にするためご援助を賜りたくお願いに伺いました。私たちはこれまで一度もキリスト教の教会へ行ったことはございません。」この義雄夫妻の熱意に対してパルモアは、全力で支援すると約束したということである。そしてパルモアは、早速毎週1時間の礼拝の時をもち、全員に讃美歌と聖書をもたせ、これらの本が何であるかを教えることから始めた。また彼は、「主の祈り」をモデルにして真の意味を教え、また聖書の創造の神が全宇宙の支配者であり、人間

一人ひとりを愛され、そのために偉大な愛をイエス・キリストに啓示されたことを教えた、ということである¹⁶。このような礼拝を1年間経過した後、パルモアは全校の教職員・生徒の前に黒板とチョークを置き、クリスチャンになりたいと望む人は黒板に名前を書くように勧めた。すると生徒の中に約40名、教職員の中に校長を含む数名の署名があった、ということである¹⁷。そして事実、増谷義雄夫妻は洗礼を受け、西宮北口の教会の教会員となった、ということである。ここに、増谷義雄のキリスト教教育に対する意気込みが見受けられる。

パルモアはその後アメリカに帰国するが、その後任として1964年から関西学院大学神学部教授で宣教師のウィリアム・ブレイ博士が週1時間来校し定期的に礼拝が行われた。また、これを補うものとして、毎日短時間の（授業時間前15分間）礼拝も行われた。これは、全校礼拝、学年礼拝、放送礼拝である。これらの礼拝には、宗教部に属する教師たちも担当した。

また、宗教教育の時間として聖書の授業が設けられた。すなわち、中学校各学年に週1時間ずつ、高校第一学年と第二学年に各1時間ずつ配当された。この聖書の授業は、近隣の牧師によって行われた。

また、宗教行事として、春には「花の日礼拝」と「母の日礼拝」、秋には「収穫感謝礼拝」、12月には「クリスマス礼拝」、三学期の卒業式前には「卒業送別礼拝」が行われ、これは現在に至るまで中学・高校において続けられている¹⁸。そしてこれは、キリスト教精神を身を以て実践するといういい体験となっていると思う。「花の日礼拝」には、生徒一人ひとりが花を持ち寄り、講堂でその花を前にしながら神について教えを受け、その後その花を持って普段世話になっている駅、交番、近くの諸施設のほか病床の友人等を見舞うならわしと

¹⁵ 『九十年史』166-167ページ。

¹⁶ 同168ページ。

¹⁷ 同169ページ。

¹⁸ 同222ページ。

なっている。また「母の日礼拝」は、母の力の偉大さと母への感謝をささげる礼拝で、説教と「母の日作文」の朗読などを行い、ともすれば忘れがちな母への感謝の気持ちを呼び起こし、感慨を新たにすよい機会となっている。「収穫感謝礼拝」では、実りの秋にちなみ偉大な神の御業と愛を教わるのである。生徒各々が果物等を持ち寄り「母の日」と同様、施設などを慰問している。「クリスマス礼拝」では、イエス・キリストの降誕の意義を毎年趣向をこらした演出で教えている。「卒業送別礼拝」では、キャンドルサービスが行われる。すなわち、暗い講堂の中で校長のもつ親火から次々生徒へ火が移され、讃美歌のメロディーを背景に次第に明るくなるが、この情景は学院の長い歴史を物語るものでもあり、長い人生への教訓を証ししているものでもあって、卒業してゆく生徒に深い感銘を与えている。

4. 短期大学、付属幼稚園の創設

1880（明治 13）年創立以来女子教育に専念してきた学院は、二代目理事長の増谷義雄の英断によって、1965（昭和 40）年 1 月 25 日に短期大学家政科設置の認可を受け、同年 4 月 20 日に開学式を挙行了。学長には清田壽が就任した。このとき、短大の教育理念は特には定められなかったようであるが、戦後夙川学院が教育理念とした「キリスト教精神」は前提であったようである。しかし、礼拝とかキリスト教の授業科目を配置するというはなかつた。ただ、入学式や卒業式が礼拝形式で行われ、またクリスマス行事などもあり、ここにわずかに「キリスト教精神」が生きていたと言える。『九十年史』には、二代目学長の高木俊蔵の文として次のように記されている¹⁹。「夙川学院は古くから宗教的情操教育を重視し、短大も創設以来この伝統を守ってきた。また大学としては当然なことであるが、学問技術を何よりも尊重する心構えを、またそれに調和する特性と

しての誠実を、言動には余裕のある優雅な態度を希求してきた。視野の広い豊かな教養、寛容な態度、その中軸としての至誠が、現在そして将来の社会の構成員の一人ひとりに望まれる。誠実の特性や優雅な言動が、これからも夙川学院短期大学における学風として志向されることは望ましいと思う。」

短大の「教育理念」としては、1980（昭和 55）年に次のように定められた。すなわち、「愛と誠実」「清新な学識」「清楚にして優雅」である。これは、短期大学教授の増谷くらの提案をもとにして専門委員会、教授会で検討したものである²⁰。『百年史』には、次のようにある²¹。「第一項では女性といわず、人間として基本的に求められる項目が述べられ、第二項では、教養豊かにして、専門とする学識に秀で、技能に熟達した女性が、社会の発展に寄与することを願い、短期大学が教授するものは、諸学・技術の基礎から、現代におけるその展開・応用に至ることを示唆している。そして学生が、自発的に研鑽し、探究心を深めてくれるように願っているのである。第三項では、本学の学生が歴史と伝統に育まれた夙川学院の構成員としての自覚と誇りを持って、しかも学生らしく清楚であって、言動優雅であることを希求しているのである。」

1965 年に家政科のみで出発した夙川学院短期大学は、その後次々と学科や定員を増やし、その発展には目を見張るものがある。すなわち、1966（昭和 41）年には保育科が、1967（昭和 42）年には美術科が、1969（昭和 44）年には英文学科が増設され、家政科は家政学科に、保育科は児童教育学科に改称された。さらに、1970（昭和 45）年には専攻科（美術専攻）が、1971（昭和 46）年には造形美術科が、2002（平成 14）年には人間コミュニケーション学科が増設された。しかしその後は、学科の廃止や定員の縮小が相次ぎ、現在は児童教育学科のみが存続している状態である。

¹⁹ 『九十年史』 243 ページ。

²⁰ 『百年史』 478 ページ。

²¹ 同 479 ページ。

さらに、2007（平成 19）年に四年生大学として神戸夙川学院大学が開学するも、2015（平成 27）年には廃止に至っている。

また、1967（昭和 42）年 3 月 31 日に短期大学付属幼稚園設置の認可を受け、4 月 11 日に開園式が挙行された。園長には増谷勲が就任した。そして付属幼稚園の園則の第一条で「この幼稚園は学校教育法第 77 条及び 78 条に従いキリスト教精神に則り、幼児に適当な環境を与えて豊かな情操教育を行い、その心身の発達を助長することを目的とする。」と謳い、戦後夙川学院が柱としてきたキリスト教教育を鮮明に打ち出した。そこで幼稚園では、宗教教育として牧師を迎えて週間礼拝が行われてきた。『九十年史』には、次のような文章が載せられている²²。「幼児期は人間形成の基礎を作る最も大切な時期である。大学付属幼稚園にふさわしい恵まれた自然環境と充実完備した施設の中で、キリスト教精神を中心に幼児教育を行い、明るく健やかな美しい心の子どもに育てることを目標とする。また、宗教教育については、牧師を迎え週一回礼拝を行い、宗教を通じて子どもたちの心の中に豊かな心情を、そして神様の恵みにより正しく育ち、健康で明るく成長することを狙いとされている。」また、『百年史』には、宗教教育を担当した橋口徳四郎牧師の次のような文章が載せられている²³。「宗教教育は人間が自分の力だけでは生きていけないことを教えることである。生きる背後に絶対者、神が存在することを教えることにある。もっと具体的には私たちはいつも神様に守られているということである。人間は弱い。いつも正しく生きることが自分の力だけではできない。神が共にいて下さるということは単に人間の心の弱さのゆえに必要なだけでなく、正しく生きることのゆえに必要なのである。宗教教育は人間が神様のために生きることを教えることである。それは同時にまた、隣人のために生きることを意味する。人のために尽くす心を育てていくこと、

宗教教育は物質的に物事を見ようとする生き方に対して、見えない世界のあることを教えることである。」

1965（昭和 40）年に短期大学を設置して以降、学院全体の宗教教育は次第に形骸化していった。「宗教教育現況」というパンフレットには以下のようにある。「短期大学を設置して以降、寄附行為からは『キリスト教精神』の文言が削除された。2005（平成 17）年には、寄附行為に『キリスト教的人道主義に則り』の文言を改めて加えたが、実質的にキリスト教教育をより充実させる体制にならなかった。」

5. 財政危機と教育改革

2007（平成 19）年に四年生大学を開学した後、大学設置認可申請書類等に不備があったため文部科学省からペナルティを受け、また、リーマンショックにより資産運用で大きな損失を出して多額の債務を抱えることとなり、学院の財務が逼迫する事態となった。

2014（平成 25）年 6 月の理事会で、藤田幸男理事長は学院再建のためには中学・高校を神戸（ポートアイランド）へ移転させ、西宮のキャンパスは売却して債務を圧縮すると共に、教育面では学校法人設立時の初心に戻ってイエス・キリストの教えを基本とした教育を本格的に行うことを提唱し、満場一致で可決した²⁴。そして、2015（平成 26）年 3 月 28 日の理事会において、寄附行為を次のように変更した。「この法人は、教育基本法及び学校教育法に従い、学校教育を行い、イエス・キリストの教えを教育の根本とし、正義と平和を愛する徳の高い人を育てることを目的とする。」これは、創設者増谷かめの「婦徳の高い人の養成」と戦後導入したキリスト教精神とを合わせた教育理念と言うことができる。

それに伴い、具体的なキリスト教教育が行われることになった。まず人事面として、樋口進を学

²² 同 294 ページ。

²³ 『百年史』 537 ページ。

²⁴ パンフレット「宗教教育現況」より。

院宗教主事として招聘し、大教室を改装してチャペル兼用教室とした。そして礼拝を行っていなかった短期大学において、2015（平成 27）年度には毎週金曜日の昼休みの 15 分間、2016 年度からは、毎週月曜日と金曜日のチャペルアワーの時間（10:55-11:15）の 20 分間に礼拝を行うようになった。また、「キリスト教学」を必修として一年生に課すようになった。また、2016 年度より学生手帳に次のような文章を載せ、入学式後のオリエンテーションにおいて、夙川学院のキリスト教教育について新入生に説明をし、理解を求めている。「子どもを育む者にとって、単に知識を身につけるだけでなく、心豊かな思いやりのある人間形成が大切なことです。本学においては、キリスト教の精神に基づいて、真の人間教育を目指します。キリスト教の聖典である『聖書』には、人間の生において最も大切なことは何かについて教える珠玉の言葉がたくさんあります。

『キリスト教学』の授業では、世界のベストセラーである『聖書』から、世界的な広い視野と価値観を学びます。旧約聖書においては、神が大いなる愛をもって人間を創造し、導き、苦しみの中にある者を救おうとしたことが記されています。また、預言者たちは、人間がその神の愛に応えて他の人を愛し、正義や公正や平和を求めることの大切さを主張しました。また、新約聖書においては、イエス・キリストが特に子どものような小さい者、弱い立場の者を愛されたことが記されており、『隣人を自分のように愛しなさい』と教えています。

また、全世界において広く歴史を展開してきたキリスト教の歩みを学ぶことによって、国際性を身につけることが出来ます。その歴史において、キリスト教の精神でもって活躍した人物（マザー・テレサなど）の働きを通して、人権や平和、エコロジーや貧困などの問題について学ぶことが出来ます。

また、礼拝や宗教行事においては、讃美歌を歌い、聖書を読み、祈りを捧げることによって、自分自身を振り返り、自分にとって大切なものにつ

いて静かに黙想し、謙遜を身につける機会となります。

そのように、本学のキリスト教教育によって、学生が、人間としての全人格が涵養され、トータルな面で教育者としてふさわしい徳を身につけ、社会に貢献できることを願っています。」

また、中学・高等学校においても専任の聖書科の教諭（宗教主事）を採用し、礼拝を毎日行い、「聖書」の科目を全クラスに配置した。

6. おわりに

夙川学院は、裁縫塾から始まったが、創立者増谷かめは、単に裁縫の技術を教えることだけに満足したのではなく、最初から人間教育を目指したのである。それが、「婦徳の高い堅実な家庭婦人の養育」という教育理念に表れている。その後の歴史において特筆すべきことは、優秀な教育者を養子縁組して創業家に迎え入れたことである。これによって、教育の質が格段に向上し、社会的にも高い評価を受ける学校として成長したということが言える。すなわち、かめには婿養子として新造を迎え、彼は校主として重要な貢献をなした。二人には子がなく、くらを養女とするが、彼女は後に夙川学院の副学院長として重要な貢献をなした。また、くらには婿養子として義雄を迎え、彼は第二代の理事長・校長として、人格教育に力を入れ、多大な功績を残した。

この学校の教育理念に大きな変遷が起こったのは、第二次世界大戦後、校舎を神戸から西宮に移転し、校名を「増谷高等女学校」から「夙川学院」に改称したときである。すなわち、二代目理事長・校長の増谷義雄は、教育理念として「キリスト教精神」を導入し、礼拝や「聖書」の授業を取り入れたのである。しかし、このキリスト教精神も時代を経るに従って次第に形骸化していった。

次の転機となったのは、学院が財政危機に陥った時である。時の理事長藤田幸男は、形骸化していたキリスト教精神を明確にすることを提案して、「イエス・キリストの教えを教育の根本とし正義

と平和を愛する徳の高い人を育てる」という教育理念を掲げ、礼拝や授業にもこれを反映させた。

さて、教育の根本は人間教育であろう。夙川学院短期大学は、幼児教育の教育者を育成することを掲げている。その教育者にとって最も重要なことは、愛であろう。教師は、児童や園児に対して一人ひとりを大切にする愛がなければ健全な教育をすることができない。短期大学の教育理念として「愛と誠実」を掲げていることは、この点で非常に的を射ていると思う。夙川学院の教育理念として「イエス・キリストの教えを教育の根本とし」とあるが、愛と誠実ということは、このイエス・キリストの教えにおいても中心的なことである。イエス・キリストは、最も重要なこととして、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」ということと、「隣人を自分のように愛しなさい」ということを教えた（マタイによる福音書 22:37-39）。また、イエス・キリストは、「正義、慈悲、誠実を最も重要なこととして行うべきだ」と教えている（マタイによる福音書 23:23）。質の高い保育者を世に送り出すことを目指している夙川学院短期大学の課題は、このようなイエス・キリストの教えの中心である「愛と誠実」を身につけた質の高い教育者を世に送り出すことによって、社会に貢献することではなからうか。

年、1-11 ページ。

ピアスーパーバイザーからのコメント

本論文は私立学校の特色に目を向け、キリスト教精神の視点を中心に、夙川学院の教育理念に関して、本学の創立から現在までの長い歴史に沿って、詳細に考察されている。『夙川学院百年史』より引用の「時間がかかってもよいかから形の崩れないように、丁寧に縫いなさい」という創設者増谷かめが塾生らにかけた言葉や、自由にならない体を持つことによって自身の内に痛みを抱えることでより深い教育者としての姿勢が育まれたのではないかと感じられる点、また「創設者かめは進歩的進取的で創造性豊かな才能の持ち主であった」との分析は印象深く、質の高い保育・教育者を育てようとする取り組み、様々な時代の中で柔軟に人間教育のあり方を探ってきたこれまでの本学の礎となる部分が示された。教育理念は生きたことばをとおして学生たちに伝えられることにより、そこで学ぶ者としての誇りとその後の人生を支える大切なものともなっていく。本学における教育理念に意味を見つけ、各自が自分なりの理解を深めるうえにおいても貴重な論考ある。

(担当：番匠明美)

7. 引用文献・参考文献

- 1) 内田樹「ミッションスクールのミッション」、『大学時報』2016.11、34-37 ページ。
- 2) 夙川学院九十年史編集委員会編『夙川学院九十年史』学校法人夙川学院、1971年
- 3) 夙川学院百年史編集委員会編『夙川学院百年史』学校法人夙川学院、1986年
- 4) 夙川学院創立130周年記念誌編集委員会編『創立百三十周年記念誌』学校法人夙川学院法人本部、2010年
- 5) 湊晶子『『キリスト教女子人格教育』の現代的使命』、『広島女学院大学論集』第63集、2016